

共同体、エクリチュール、物

——ジャン＝リュック・ナンシーにおける抵抗のポリティクス——

小 田 麟太郎

はじめに

1988年に出版された雑誌『アレア』第4号に掲載された論文「無為の共同体」以来、現代フランスの哲学者ジャン＝リュック・ナンシーは共同体論の論客として多くの注目を集めてきた。おそらくは、1988年的な「われわれ」からの断絶(1)、ソビエト崩壊の予兆とそれに伴う「共産主義」なるものに対するいや増す不信、しかし尚も決して乗り越えられなかったわけではない「自由主義」や「個人主義」なるものの空疎さ、加えて、いまだ深い傷跡として記憶される「民族」なるものの暴力性、こうした時代の雰囲気とともに彼の言説は迎え入れられた。

かつてあったはずのものとして表象される「失われた共同体」も私たちがそれを目指して自らを投企するような作品としての共同体をも退ける彼の言説は、こうした時代において

共同体を思考するための不可避の前提を明確化しているように思われる。しかし、それでは「無為の共同体」とは何だろうか。この問いは、その名がある意味では名指すことそれ自体の不可能性を告げる名であるが故に、私たちの把握をずるりと逃れ去って行く。

当該論文をきっかけとするブランショとの論争関係や英米圏の政治哲学における所謂「共同体主義」との関係など、彼の共同体論は様々な角度から論じられてきたものの、その全貌は未だ明らかになっていない。私見では、同時期の彼自身の諸論考との連関が十分に検討されて来なかったことにその原因があると思われる。先行研究においては、いわばナンシー哲学に内在的にその共同体論を検討するといった視点が欠けているのである(2)。

このような解釈の立場に立つとき、私たちはあからさまに「共同体」という主題が問題とされてはいない他の論考、取

り分け1980年代から90年代にかけての重要なモチーフである「エクリチュール」や「物」に関する議論までも、その共同体論との連関において検討しなくてはならない。そして以下で明らかにするように、事実、それらは「抵抗」という点において密接に連関しているのである。

本稿の目論見は以下である。1980年代、90年代のナンシーの議論の内に「抵抗」という一貫した問題意識を読み取ること。それを通じて、「共同体」「エクリチュール」「物」といった主要なモチーフ相互の連関を明らかにすること。加えて、ナンシー解釈の枠を超えて、抵抗という政治的实践における重要な示唆を彼のテクストから学び取ること。

私たちはまず、1. 『無為の共同体』(1986) 所収の同名の論文「無為の共同体」における議論を検討し、そこで「無為の共同体」が「抵抗」という観点から特徴づけられていること、それが書くことという政治的实践の問いと結びつくものであることを確認する⁽³⁾。次いで、2. 同じく『無為の共同体』所収の論文「文学的共産主義」において、そうした書くことを巡る問いが展開されていることを確認し、そこで「書き込み」としての抵抗と「書き込み」に先立つ抵抗という二重の抵抗が問題にされていることを確認する。そして、3. 『有限な思考』(1990) 所収の論文「外記」におけるエクリチュールを巡る議論の内に、そうした書くことを巡る問いの更なる深化を見てとる。最後に、4. 論文「外記」と表裏の関係にある論文「諸物の核心」同じく『有限な思考』所収(に着目し、論文「諸物の核心」や『自由の経験』(1988)に

おいて論じられる「物」というモチーフが書くこととの関係において有する緊張を明らかにする。以て、論文「無為の共同体」において要請された、書くことという政治的实践の有する可能性と不可能性を明確化する。

1. 内在に対する抵抗としての共同体

ナンシーは「共同体」を巡る言説の多くが、それが「共産主義」であれ、「失われた共同体」であれ、「民族」に関するものであれ、内在主義と呼ぶべきものに捕らわれたままであるということを描している。それは次のように特徴づけられている。

人間に対する人間の内在、あるいはまた、絶対的に、優れて内在的な存在として見做された人間こそが、共同体の思考の躓きの石となっている。人間たちの共同体であるべきものとして前提された共同体は、そのようなものとして、それに固有な本質、つまりはそれ自身人間の本質の成就であるような本質を全面的に実現する、あるいは実現せねばならないということを前提としているのだ。
(CD, 15[7-8])

何らかの人間の本質を前提とし、その本質を成就するものとして人間たちの共同体を思い描くような思考。人間を生産者として定義する共産主義であれ、「共同体が緊密で調和のとれた堅固な絆で織りなされ、その制度、儀式、象徴の内で、

それに固有な統一、その親密さ、その内在的自律の表象、更にはその生きた捧げ物を、それ自身に対して与えていたような失われた時代」(CD, 30 [19])として思い描かれるような「自然的家族、アテネ都市国家、ローマ共和制、初期キリスト教共同体、同業組合、自由都市、あるいは兄弟会」(CD, 29-30 [19])であれ、「アリア人」共同体」(CD, 36 [24])であれ、いずれもが、このように共同体の理念とその構成員たちの本質とを内在的に同一のものとして表象するような思考に捕らわれているというのである。

そして、そうした「内在、合一的融合が隠し持っているのは、死の真理に倣った共同体の自殺の論理に他ならない」(CD, 36 [24])のだけ指摘される。

ナチス・ドイツの論理は、他者の、血と大地の合一の外・部なる下等人間の絶滅の論理だというだけでなく、同時に、潜在的には、「アリア人」共同体において、純粋・内在の諸基準を満たさない全ての者の犠牲の論理でもあり、そのため、そうした諸規準は明らかに決定不可能なものであるから、その過程をもっともらしく敷衍したならばドイツ国民それ自身の自殺によって表象され得ただろう。(CD, 36 [24])

人間の本質が指定され、その本質の成就として思い描かれた共同体は、自らを成就する過程で本質外のことを犠牲にすることとなる。しかし、純粋な内在、つまりは純粋に本質的

であることが人間にとって不可能である以上、そうした共同体の成就是、その構成員が構成員自身を殺害すること、最終的には万人の自殺によって表象されざるを得ないというのである。

そうである以上、私たちは「共同体とは何か」あるいは「いかなる共同体の理念を掲げるべきか」といった問いそれ自体をラディカルに批判し、別様な仕方で共同体を思考しなくてはならない。「おそらく語や概念を探し求めてはならず、共同体の思考の内に、私たちに對して言説と共同体の別な実践を強いるであろう、理論的過剰(より正確には、理論的なものに對する過剰)を認めなくてはならないのだ」(CD, 66 [47])、そして「そこには、明らかに、言説とエクリチュールの倫理、政治が関わっている」(CD, 66 [47])とされる。共同体の本質を指定することなく、それでいて「共同体の言説」(CD, 66 [47])であるような言説の可能性が問題とされるのである。このように、ナンシーは共同体を巡る従来の言説に認められる内在主義を批判しつつ、如何にして別様に共同体について書くべきかという問い、ナンシー自身が暫定的に「文学的・共產主義」「共同主義・communisme」の問い」(CD, 67 [48])（４）と呼ぶ問いに向かつて行くのである。

しかし、こうした問いは明らかにそれに固有のアポリアを有している。言説があくまでも「語や概念」を用いるものであり、そうした「語や概念」が本質の指定と通ずるものでありながら、本質指定的ならざる「共同体」を巡る言説を行わなくてはならない。共同体の新たな言説は言説を超過するも

のと関わらなければならないのである。そのため、ナンシーは逆説的にも次のように述べる。

今や、バタイユとともに、バタイユに（そして他の幾人かに）よって、この問いに接近することが問題である。しかし、もちろん、バタイユの注釈が問題なのでも、誰のものであれ注釈が問題なのでもない。というのも、共同体は恐らく、未だかつて思考されたことが無いからだ。そしてまた、私がたった一人で共同体の新たな言説を作り上げるなどと主張する訳でもない。というのも、言説が問題なのでも、孤立が問題なのでもないからだ。しかし、私は、極限において、一つの経験を示さんとしている。恐らくは、私たちが行う経験ではなく、私たちを存在させる経験である。(CD, 67 [48]) (65)

「文学的共産主義の問い」においては、決して単に言説だけが問題とされるのではない。寧ろ、言説と言説を超過するものとの緊張を含んだ極限的な「経験」をこそナンシーは問うているのである(6)。

こうした問いにおいて共同体とはもはや何らかの本質を成就すべき「作品」ではなく、「ブランシヨが無為」「脱作品(déseignement)」と呼んだものの内に必然的に生起する」(CD, 78 [57]) の、「作品の手前、あるいは彼方で、作品から退引するもの、生産とも、完成ともはや関りを持たないもの、中断、断片化、宙吊りに遭遇するもの」(CD, 78-79 [57]) と

あるとされる。ナンシーは更に、「共同体とは、ある意味では、抵抗そのものである。つまりは内在に對する抵抗だ」(CD, 88 [64]) (7)と述べている。人間の本質の措定とその完成としての共同体に抵抗すること。逆説的にもそうした「経験」に「無為の共同体」と呼ぶべき「未聞のもの」(CD, 68 [48]) が看取されているのである。無論、私たちはそれを定義づけることが出来ない。繰り返しになるが、言説とそれを越えるものとの関りにおいて、それを「経験」しなくてはならないのである。ナンシーはそうした「経験」に「政治的なもの」という問題をも見てとり、次のように述べている。

「政治的なもの」とは、自らのコミュニケーションの無為へと向けて秩序付けられた共同体、あるいはそうした無為へと運命づけられた共同体のことを言わんとしている。意識的に自らの分有の経験を行う共同体である。「政治的なもの」のそうした意味作用に到達することは、人が「政治的意志」と呼ぶものに、いずれにせよ単にそれだけには、依存していない。それは共同体の内にすでに巻き込まれているということを、つまりは、どんな仕方であれ、コミュニケーションとして共同体を経験することを含意している。それは書くということを含意しているのだ。書くことを、私たちの共に一あることの特異な輪郭線が露呈されるがままになることを止めてはならない。(CD, 100 [74]) (8)

「無為の共同体」は書くことという「政治的なもの」の実践において「経験」されるものである。それはいかなる仕方でも書くことであろうか。ナンシーの共同体論はこのように共同体を巡る従来の言説に認められる内在主義を批判しつつ、それに抵抗するような書くことという政治的実践の問いへと向かって行くのである。「無為の共同体」以降のテキストにおいて、「共同体」という語が直接的に主題化されることは少なくなるが、それは共同体論の放棄を意味するものでは決してない。寧ろ「無為の共同体」という「経験」の定義不可能性に則した問いの深化を意味しているのである。私たちは「無為の共同体」以降のテキストにおいて中心的なものとなる書くことを巡る議論の内に共同体論からの転向ではなく、その深化をこそ見てとらなくてはならない。

2. 書くことの問い、「文学的共産主義」

論文「文学的共産主義」において、こうした書くことの問いが更に展開されている。前節において、私たちは「文学的共産主義の問い」と呼ばれる問いが、共同体を巡る言説の内在主義に抵抗しつつ、どのように新たな言説を行うべきかという問いであることを確認した。そして、そうした言説は不可避的に言説を超過するものと関わらざるを得ない。論文「文学的共産主義」においてはそうした言説が次のように特徴づけられている。

「文学的共産主義」とは、少なくとも次のことを示して

いる。共同体が、（語のあらゆる意味において）それを完成させようとするあらゆるものに對する無限の抵抗の内で、抑えがたい政治的要請を意味しており、この政治的要請が、今度は、「文学」の何らかを、私たちの無限の抵抗の書き込みを要請しているということである（CD, 198 [153]）

私たちはここに、内在主義に対する抵抗の二重性を見てとらなくてはならない。すなわち、「書き込み」に先立つ「共同体」それ自体の抵抗、そしてそうした抵抗によって政治的に要請される「書き込み」としての抵抗である。「書き込み」に先立つ「共同体」それ自体が内在主義に抵抗するものであるからこそ、「書き込み」としての抵抗が要請されているのだ。そうした「書き込み」に先立つ抵抗に関しては、更に次のようにも述べられている。

文学的共産主義は、ある一つの政治も、ある一つのエクリチュールも定義することはない。というのも、それは反対に、政治的なものであれ、倫理的なものであれ、哲学的なものであれ、定義と計画に抵抗するものへと送り返すからだ。しかし、それはあらゆる「政治」、あらゆる「エクリチュール」に満足するという訳でもない。それは、私たちが発明するということではなく、寧ろ私たちに先行する、共同体の奥底で私たちに先行する、この「文学的共産主義的」抵抗へと向けた決意を示しているのだ。

(CD, 198 [153])

「文学的共産主義」がある特定の「政治」や「エクリチュール」のあり方を定義するものではなく、「共同体の奥底で私たちに先行する」抵抗へと向けた決意を示しているのだという点が指摘されつつ、そうした抵抗もまた「文学的共産主義的」抵抗と呼ばれている。しかし、そうした抵抗によって要請される「書き込み」としての抵抗を「文学的共産主義的」と形容することは認められるとしても、「書き込み」に先立つ抵抗をもそうした形容によって理解することは果たして正当であろうか。ナンシーはそうした抵抗の境地を「私たちを召喚する呼びかけ」(CD, 178 [137]) や「いかなる主体の声でもあり得ないだろう声」(CD, 196 [153]) などとも形容しているが、そのように「呼びかけ」や「声」といった言語的なモデルを用いて、「書き込み」に先立つ抵抗を理解しようとすることは倒錯であろう⁽⁹⁾。論文「文学的共産主義」においては、「書き込み」としての抵抗とそうした「書き込み」を要請する「書き込み」に先立つ抵抗のどちらもが「文学的共産主義」という形容の下で理解されているため、二つの抵抗の質的差異が曖昧なものに留まってしまっているのである。しかし、論文「文学的共産主義」においては、多くの箇所ではその言葉が括弧に括られて用いられており、「そこで理解しなければならないだろうものは、私たちが意のままにできるような「共同体」の理念にも、「文学」の理念にも、結局のところ、まったく一致するものがなく」(CD, 196-

197 [152]) と述べられているように、ナンシー自身そうした形容の不十分さを自覚しつつ議論を展開している。そのため、後のテキストにおいては「文学的共産主義」という語は姿を消すのだが、私たちは尚も引き続き論じられている書くことを巡る問いの内に問いの更なる自覚的な深まりを見てとらなくてはならない。

3. 書くこととしての抵抗、「外記」

論文「外記」においても、論文「無為の共同体」と同じくバタイユが参照されつつ書くことの問いが更に展開されている。論文「無為の共同体」においてと同じく、ナンシーは単にバタイユを注釈するような態度を警戒しつつも、バタイユその人のエクリチュールから言説を超過するものと関わるような言説のあり方を抽出せんと試みているのである。それは「内記」[「書き込み inscription」]であると同時に「外記」[「書き出し excription」]でもあるようなエクリチュールだとされる。ナンシーは次のように述べている。

エクリチュールは意味を外記する。つまり、それは、問題になっているもの、物そのもの、バタイユの「生」あるいは「叫び」、結局のところテキストの中で「問われている」あらゆる物の実存（そこには、最も特異なもの、エクリチュールそれ自身の実存も含まれる）はテキストの外にあり、エクリチュールの外で生起するということを示すのだ。(PF, 61 [67])

テクストの外、エクリチュールの外で問題となっているものが生じるようなエクリチュールの作用を、ナンシーは一般的に書くことを意味する「内記」という語に對置して「外記」と呼んでいる。とはいえ、「今日は晴れている」という言葉が「今日は晴れている」という具体的な現実を指示し得るように、書くことは一般的に言つてテクストの外部を指示することであり得るのではないだろうか。しかし、そうした作用はあくまで「内記」に属するものである。ナンシーは次のように述べている。

しかしながら、この「外部」は意味作用が送り返すであろう指示対象の外部（例えば、「私の生」という語によつて意味されるバタイユの「現実の」生）ではない。指示対象がそのようなものとして呈示されるのは意味作用によつてではない。しかし、この（全くもつてテクストの内に外記された）「外部」は、それによつて各々の実存が実存するところの意味の無限の退引である。（*ib.*, 61 [67]

言葉は一般的にその指示対象を有していると見做されるが、「外記」されるのはそうした指示対象に属するような外部ではない。寧ろ、言葉とその指示対象との連関であるような「意味作用 *signification*」から更に逸脱して行くような動的な「意味 *sens*」を、ナンシーはここで「外記」によつて示されるような外部だとしているのだ。私たちはここに、論文

「無為の共同体」から一貫する内在主義的言説に對する批判を見てとることができる。「意味作用」に對する批判は『哲学の忘却』（1986）において詳述されているが、ここでは（取り分けカントが参照されつつ）次のように述べられているのだ。

概念は思考し、直観は見る、直観が見るものを概念は思考し、概念が思考するものを直観は見る。意味作用とは、このように自己に閉じた、あるいは更に言えば自己への閉じ籠りとしての構造、あるいは体系のモデルそのものである。人間主義の意味作用とは、人間の現実が「人間」として示された理念性に直に接して自らを呈示するということである。意味作用の人間主義とは、人間の理念性がその感性的現実、その諸作品、そして／あるいはその諸記号の現実¹に直に接して自らを呈示するということである。（*ib.* 31-32 [41]

現実¹にびたりと対応するように概念を割り振ること、そのように割り振られた対応関係のシステムを前提として現実を呈示せんとすること、それは理念化し得ない過剰を現実に對して認めないことであり、例えば人間という現実とその理念とを内在的に一つながりのものとして理解することである。そうした内在主義的な意味作用のシステムに抵抗するためには、その更に外部へと向けて言葉を用いなくてはならない。ナンシーは次のように述べている。

書きながら、読みながら、私は物そのもの（「実存」、「現実」）を外記する。それは外記されてしかあらず、その存在は内記の唯一の賭け金をなしている。諸々の意味作用を内記しつつ、人はあらゆる意味作用から退引する現前、存在そのもの（生、情熱、物質……）を外記する。（p. 63 [69]）

言葉がその指示対象と結びつくものでありながら、その更に外部をも示さんとして言葉を用いること、それは「意味作用」の体系が不可避免的に有する綻びを明らかにすべく、（ナンシーが正に「外記」という新語を發明したように）新たな語を發明すること、あるいは通常の語を異様な仕方を用いること、更にはテキストをそうした仕方を読むことであろう⁽¹⁰⁾。そうした「外記」というエクリチュールのあり方を、ナンシーはバタイユのエクリチュールから引き出しているのだ。論文「外記」においては、言説を超過するものと関わるような言説のあり方、論文「無為の共同体」において問題とされた言説のあり方が「意味作用」を越えて「意味」をなすような「外記」というあり方として明確化されているのである。私たちはここに、「書き込み」としての抵抗という側面の深まりを見てとることができるだろう。

しかし、前節で確認したように、そうした「書き込み」としての抵抗は「書き込み」に先立つ抵抗によってこそ要請されるものである。事実、論文「外記」においても、上の引用においても既に見てとれるように、そうした「外記」として

のエクリチュールの更に外部なる「物」の側面が問題とされている。次のように述べられているのだ。

外記されてあるのは、諸物の核心である。（p. 63 [69]）

論文「外記」において「諸物の核心」というモチーフが詳述されることはないものの、私たちは同じく『有限な思考』に収められた論文「諸物の核心」の内にそうした側面に対する問いの深まりを見てとることができるだろう⁽¹¹⁾。

4. 書くことに先立つ抵抗、「諸物の核心」

論文「諸物の核心」において、ナンシーはある特定の言語使用をモデルとすることなく、あらゆる言語使用が「外記」的であり得ることを指摘しつつ、言語の限界において立ち上がるその外部を「物」として問題にしている。

実際、言語は常にその外部で終わる。言語のあらゆる使用において、そのあらゆる使用によって、あらゆる言語の不在、言語のみが示す怪物が立ち上がる。しかし、それは外記されつつ立ち上がるのだ。「エクリチュール」のいかなる思考も、それ以外の賭け金を持つことはなかった。物という賭け金である。（p. 208 [245]）

ナンシーはここで「物」という語に極度の負荷をかけている。なぜならそれは言語の外部を名指す言語であるからだ。

ナンシーは「物」という語を「無」と通い合わせつつ、その破格な用法によって、言語の外部たる境地を特徴付けんとしているのである⁽¹²⁾。

私たちは先に、論文「文学的共產主義」において「書き込み」に先立つ抵抗が言語的なモデルで理解されてしまっていることを確認したが、論文「諸物の核心」においてはそうしたモデルが明確に退けられつつ、言語の外部たる境地が探求されている。ナンシーは「物」をその雄弁さにおいて理解せんとするハイデガーを批判しつつ次のように述べているのだ。

ハイデガーその人が物を指し示すとき、音による、あるいは意味による、意味としての音による、音を出す物としての意味による交信が問題となつてゐる。調律され、我有化された応答が問題となつてゐる。しかし、諸物の核心「=心臓 *cœur*」が鼓動することもなく、諸物の何らかの核心が呼びかけも問いも差し向けないとしたらどうだろうか。この核心が私たちのあらゆる問い、あらゆる要求をただ外記するだけだとしたらどうだろうか。(PF, 211 [248])

ナンシーは「そこには、反対に、諸物の奇妙な固有語」[*l'unique*]があるのだろう」(PF, 211 [248])と続け、それらは「絶対的に私秘的で、馬鹿げた、意味をなさない言語」(PF, 211 [248])であると述べる。ナンシーはこのように言語の外部たる物の境地を「発話においてまで、常にそれ自身不動で

あるような、語それ自身の無一言」(PF, 198 [232])、「それから何も、いかなる光も逃れ去ることのないブラックホール、絶対的重力の穴」(PF, 198 [233])として、つまりは言語に抗うような不動の境地として特徴付けるのだ。

ナンシーにとつて思考することとは正に書くことであるが、そうした「言説の活動を始動させるといふ意味での「思考すること」とは、言説それ自身をこの重力の契機へ、この「ブラックホール」へと導くことである」(PF, 199 [233])とされる。しかし、そうした「外記」としての思考はそれ自身に閉じた「意味作用」という内在主義的システムに抗いつつ、尚も「物」との緊張関係の内にある。「諸物の核心」とは「思考がそれによつかり、跳ね返るような位置」[*position*]、対位置「=配置 *disposition*」、外位置「=曝露 *exposition*」(PF, 197 [231])だとされるのである⁽¹³⁾。

ここに至つて、私たちは論文「文学的共產主義」における抵抗の二重性の明確化を認めることができる。それは即ち、書くことに先立つて書くことに抵抗するような「物」の不動の抵抗であり、そうした「物」へと向かつて言葉を用いることで、通常の「意味作用」を逸脱し内在主義に抵抗するような動的「意味」をなす「外記」としてのエクリチュールの抵抗である⁽¹⁴⁾。「物」の抵抗とエクリチュールの抵抗は「意味作用」という内在主義的システムに対する抵抗という点において共犯関係にあるものの、それら相互の関係にも依然として緊張が認められる。「物」は「外記」としてのエクリチュールにも抵抗するのである。

最後に、引き続き検討すべき問いを確認し、本節を終えることとしたい。それは「物」なるモチーフの正当性を巡る問いである。ナンシーは言語の外部を言語的なモデルで理解せんとすることから撤退しつつ、しかし尚もそれを「物」と名指してしまっている。そうした外的境地の實在に関して、ナンシーは結局のところ非常に確信的なのだ。次のように述べられている。

この物が存在すること、そしてそれが何らかの物であるということ、それは思考そのものの内であらゆる思考に先立つ絶対的な知の内容である。それは、自由の経験としての実存の必然性の経験である。(PF: 209 [246])

「物」の實在に関する絶対的確信に「自由の経験」の名が充てられている。ここに、論文「無為の共同体」において示された「コミュニケーションとして共同体を経験すること」というモチーフの深化を見とることも可能だろう。ナンシーは正にこの「自由の経験」というモチーフを巡って一冊の書物『自由の経験』を物しているのだが、そこで問題とされているのは自由という事実、それも「この事実の事実性は超歴史的な知覚的明証性に属するものではなく、一つの歴史によって自らをなし、自らを経験に知らしめる」(BT, 15 [4])とされるような事実である。「物」というモチーフを取って使用することには、哲学史の全体を自覚的に相手取った賭け金が賭けられているのである。「物そのもの」と

は哲学史において決して珍しいモチーフではない。寧ろ、多くの哲学者が正に「物そのもの」へと向かって思考を展開してきたと言えるだろう。そうした哲学史上における「物」の特徴づけとの自覚的な差異化に関して、私たちは尚も精査する必要がある⁽¹⁵⁾。

おわりに

共同体を巡る言説の内在主義を批判しつつ、内在主義とは別の仕方を書くことという政治的実践を巡るナンシーの問いは「文学的共産主義の問い」を経由し、「物」へと向けて「意味作用」を逸脱し「意味」をなす「外記」という破格なエクリチュールの問いに結実した。それは「意味作用」に抵抗し「物」へと向かうようなエクリチュールであると同時に、「物」の抵抗を被るエクリチュールでもある。

仮に、「物」の抵抗を受けることのないエクリチュールが存在するとしたらどうだろうか。それは即ち、現実の全てを余すことなく指示することのできる言語、神の言語として表象し得るような絶対的な「意味作用」の内にある言語ということになるだろう。私たちは少なくともそのような言語を未だ手にしてはいない。言語、思考をその有限性において認めるのであれば、私たちは絶えず、その外部たる「物」に対して応答責任を負わなくてはならない。それは通常の「意味作用」を逸脱するようなエクリチュールの抵抗としてなされる。しかし、いかなるエクリチュールとしての抵抗も自らが抵抗するものに他ならないなどと詐称することは出来ない。それ

自身が「物」の抵抗を被っているからだ。しかし、それは有限なエクリチュールの抵抗に不可避免的に含まれる不可能性である。そのため、それは裏を返せば、私たちが抵抗の必然性に駆られるときその不純さが抵抗を差し控える理由には全くならないということをも意味しているだろう。「共同体」を、諸々の存在者の意味を十全に指示しているかのように騙る内在主義的な言説に対して、私たちは絶えずその綻びを指摘し、「外記」的に抵抗のエクリチュールを作動させなくてはならない。そのようにして初めて、理念的なものに収まることのない剥き出しの「無為の共同体」が経験されるだろう。

「政治的なもの」という主題に関しては、論文「無為の共同体」に先立つ「政治的なものについての哲学的研究センター」での活動や、それ以後の論点の変遷をも辿ることにより詳細にその内実を検討する必要がある。また、紙幅の関係から本稿では捨象せざるを得なかったいくつかの重要な論点、「死」、「神話」などに関しても、今後稿を改めて検討し直さなくてはならない。(16)

とはいえ、本稿では、先行研究において未だ明らかにされていなかった1980年代から90年代にかけての抵抗の二重性、「共同体」、「エクリチュール」、「物」といった主要モチーフ相互の連関を明らかにした。この点を以て一つの成果とし、爾余の点に関しては今後の課題としたい。

【凡例】

原文で斜体により強調されている箇所は翻訳の際、傍点に

より強調した。引用文中の「」内は筆者による補足。邦訳の有るものは適宜参照し、「」内にその頁数を併記した。引用文の訳は全て筆者による。

【参考文献】

- Nancy, Jean-Luc,
 CD : *La communauté déseuvrée*, 2ème édition, Christian Bourgois, 1990 [1986]. (『無為の共同体——哲学を問い直す分有の思考』、西谷修ほか訳、以文社、2001年)
 CDA : « La communauté déseuvrée », *Aléa*, n°4, Christian Bourgois, 1983, pp.11-49. (『無為の共同体——バタイユの恍惚から』、西谷修訳、朝日出版社、1985年)
 EL : *L'expérience de la liberté*, Gallilée, 1988. (『自由の経験』、澤田直訳、未來社、2000年)
 OP : *L'oubli de la philosophie*, Gallilée, 1986. (『哲学の忘却』、大西雅一郎訳、松籟社、2000年)
 PF : *Une pensée finie*, Gallilée, 1990. (『限りある思考』、合田正人訳、法政大学出版局、2011年)
 Devisch, Ignas, *Jean-Luc Nancy and the Question of Community*, Bloomsbury, 2013.
 Hill, Leslie, *Nancy, Blanchot: A Serious Controversy*, Rowman&Littlefield, 2018.
 Hutchens, B.C., *Jean-Luc Nancy and the Future of Philosophy*, McGill-Queen's University Press, 2005.
 James, Ian, *The fragmentary demand: An Introduction to the Philosophy of Jean-Luc Nancy*, Stanford University Press, 2006.

Morin, Marie-Eve, *Jean-Luc Nancy*, Polity Press, 2012.

安藤歴「「引き退き」はいかなる意味で実践的なのか——ジャン・リユック・ナンシーとフィリップ・ラクーーラバルトの提起をめぐって」、『Supplements』、脱構築研究会、第1号、2023年、1-14頁

市川崇「時間、エクリチュール、政治——ジョルジュ・パタユとジャン・リユック・ナンシー」、『多様体』、月曜社、第2号、2020年、67-86頁。

伊藤潤一郎『ジャン・リユック・ナンシーと不定の二人称』、人文書院、2022年。

小田麟太郎「ナンシー自由論の解明——「物の力としての自由」の存在論的射程について」、『実存思想論集』、知泉書館、第36号、2021年、151-166頁。

柿並良佑「存在論は政治的か?」、『思想』、岩波書店、第1078号、2014年、67-93頁。

松葉祥一「5 政治的なもの（から）の引退——ナンシー＋ラクーーラバルトと「政治的なもの」についての哲学的研究センター」、『哲学的なもの政治的なもの——開かれた現象学のために』、青土社、2010年、101-128頁。

横田祐美子「終わりなき有限性——ジャン・リユック・ナンシーにおける「外記」としてのエクリチュール」、『日本フランス語フランス文学会関東支部論集』、日本フランス語フランス文学会関東支部、第29号、2020年、127-139頁。

本研究は JSPS 科研費 JP22J10025 の助成を受けたものです。

【註】

(1) 1968年の出来事に対するナンシーの思想的隔たり、あるいは近接性に関しては、別途慎重な検討が必要だろう。とはいえ、『明かしえぬ共同体』においてそれを積極的な参照項とするブランシヨとは異なり、ナンシーは、少なくとも論文「無為の共同体」においては、そこに「ファシズムの狂乱」あるいは「祝祭」に対する「曖昧な郷愁」の回帰を見てとっているのみである。CD 54137-38 参照。

(2) ブランシヨとの論争関係に焦点を絞った先行研究としては Hill [2018]、ブランシヨとの論争関係に着目しつつナンシーの共同体論を検討する先行研究としては James [2006]、173-201, Morin [2012]、72-95、「共同体主義」との関係を検討する先行研究としては Devisch [2013]、6-37, Hutchens [2005]、103-124 などが挙げられる。しかし、何れも、私たちが以下で明らかにするように、それが書くことを巡る問いの深まりという方向において展開されているという点を十分に見て取ってはならず、そのため、本稿以下で指摘される抵抗の二重性や『有限な思考』所収の諸論考との連関が明らかにされていく。

(3) 論文「無為の共同体」は1986年に単行本に収められるにあたって多くの加筆修正が施されている。本稿ではそれ以降のナンシーの他のテクストとの連関をたどる意図から、基本的には1986年版に依拠し、重要な異同が認められる箇所に関してのみ注でその旨を指摘している。

(4) 1983年版にこの記述は見られない。とはいえ、「文学的共同体主義」という形容は他の箇所に見えてくるものが出来

2° CDA, 46 [115] 参照。

(5) この箇所は1986年版で多くの加筆修正がなされている。

(6) 以下で明らかにされる諸点を先取りするならば、そうした「経験」とはあらかじめその内実が想定された「私たち」なる内在主義的主体の行う経験ではなく、寧ろそうした主体を超過するものとの関りにおいて剥き出しの「私たち」という共同体が現れるという特異な経験であると言える。引用文の末尾で示された表現はこのように解釈することができらう。

(7) 1983年版にこの記述は見られない。とはいえ、共同体に抵抗の働きを認める記述は他の箇所に既に見てとることが出来る。CDA, 43 [105] 参照。

(8) この箇所は1986年版で多くの加筆修正がなされている。とはいえ、「書くことを止めてはならない」という主張は1983年版でも既になされている。CDA, 48 [120] 参照。

(9) 伊藤 [2022] は、論文「『文学的共産主義』」に関して、「言表行為に関して練り上げられた議論がほぼそのまま存在の次元へと移されている」(伊藤 [2022], 213) と指摘している。事実、私たちが確認したように、当該論文では言語に先立つ次元にまで言語的なモデルが投影されてしまっている。しかし、それぞれの領域を仮に「言語論」、「存在論」と呼ぶのであれば、そこで「存在論だけが語られる」(伊藤 [2022], 213) と解釈することは困難であろう。論文「無為の共同体」やそれ以後のテキストとの連関を考慮するならば、私たちが本稿で指摘するように、そこには確かに具体的な書くこととの問いも見えてとられる。

(10) 「外記」というエクリチュールのあり方に関して、取り分

け「意味作用」と「意味」との緊張関係に着目して検討した先行研究として横田 [2020] を参照。「外記」というエクリチュールのあり方に関しては、更にナンシーその人のエクリチュールの特徴から補って解釈した。この点に関しては伊藤 [2022], 249-265 を参照。

(11) 以上までの議論から、「外記」というモチーフによって示される外部に二つの側面を見てとることができらう。つまりは、「意味作用」を動的に逸脱する「意味」、そして更にその外部たる不動の(この点に関しては本稿4節で指摘される)「物」である。James [2006], 149-150 や Morin [2012], 131-133 がこれに類似した解釈を呈示している。とはいえ、両者とも論文「『文学的共産主義』」における抵抗の二重性を指摘してはならず、如上の論点を論文「無為の共同体」や論文「『文学的共産主義』」における書くことを巡る問いとの連続性において明らかにしてはいない。

(12) 次のように述べられている。「物の思考は「物と名」についてのあらゆる考察の前に位置づけられなくてはならない。既に、「物」というこの名の内に、命名のあらゆる活動が、従ってあらゆる問いが、消え去りつつあるということが示されている。物とは、あらゆる物の意味としての、意味の無(物[*res*])を示す語である」(PF, 207 [244])。

(13) ナンシーは特に説明なくこの三つの語を並置しているが、「諸物の核心」が思考に対抗するような外部の座を示しているということだと解釈し、以上のような訳語を充てた。

(14) 論文「外記」において「意味とは、ここでは、運動、進行のことである」(PF, 60 [66]) と述べられているのに対して、論文「諸物の核心」は「この不動の核心は鼓動することさ

えない。それは諸物の核心である」(PF, 197 [231]) というフレーズから始まっている。「思考は」それ自身を運動性として、あるいは運動化としてしか思考することができない」(PF, 202 [237]) のに対して「諸物の核心はそこで妨害し、そこで無感覚なままに留まる」(PF, 202 [237]) とされているのである。

(15) この点に関しては、拙論小田 [2021] において既に部分的な検討を試みている。

(16) ナンシーの政治論の変遷に関しては柿並 [2014]、また「政治的なものについての哲学的研究センター」に関しては安藤 [2022] や松葉 [2010]、¹⁶「神話」というモチーフに関しては市川 [2020] ほか『多様体』第2号所収の諸論考を参照されたい。